

下級巫女、行き遅れたら

能力上がって聖女並みになりました 2



◎マーティ◎

駐屯地の将来有望な若い兵。
ハナを慕い、ミーサウ王国では
護衛の任につく。



◎ガルン◎

キノ王国の駐屯地をまとめる総隊長。
侯爵家の跡継ぎだが、
そう見えなくらい庶民的。



◎イシュル◎

ミーサウ王国の王子。
真面目で礼儀正しい少年。



◎ルーシェ◎

キノ王国の聖女候補。
自分に自信がなく、次期聖女の
立場を重く感じている。



◎ハナ◎

キノ王国の駐屯地で働いていた巫女。
聖女候補であるルーシェのお付きとして、
ミーサウ王国へ向かうことに。
普段は眼鏡にマスク、ひつまめ髪の
イケていない格好だが、実は美人。
長年の努力で、癒しの能力が
聖女並みに上がっている。

素顔は…

金髪に紫の瞳の色白美人。



◎謎の男◎

各地でハナと遭遇する、
金髪碧眼の美青年。
ハナを聖女と崇めるが、
その真意は……？

登場人物紹介

第一章 行き遅れ巫女、聖女の影武者になる

「うん、王都の様子もだいぶ落ち着いたみたいね」

ガタガタと揺れる馬車の中、カーテンの隙間から通り過ぎる街並みを眺める。

「ハナ巫女のおかげね」

逆側の窓から外を眺めていたルーシエが、私に笑顔を向けた。

今、私とルーシエが乗っているのは、キノ王国の王城を出発し、ミーサウ王国に向かう馬車だ。

この世界には癒^いしの力を持った「巫女」と呼ばれる女性たちがいる。

巫女の中で最も力の強い者は、聖女と呼ばれる。

上級巫女は、命に係わる大怪我や大病を完治させられる力を持った者。

中級巫女は、完治まではいかないものの、命をつなぐことができる力を持った者。

下級巫女は、かすり傷を癒^いしたり、少しだけ熱を下げる程度の力を持った者。

ルーシエは聖女候補だ。本来なら最底辺の下級巫女の私と行動を共にするようなことはないんだけれど。

……ここ数日の出来事を思い出す。

私たちが暮らすキノ王国で、感染力が強く、体力のある兵たちも次々に倒れていくほど強力なはやり病が広がった。

多くの人が亡くなってしまう、一時はどうなるかと思った。けれど、癒しの力を持ったたくさん

の巫女たちの働きで近く収束しそうだ。
「ハナ巫女が、巫女が巫女を癒すと魔力も回復するから、多くの人を癒すことができるって発見したおかげ」

「発見といっても、偶然知っただけだし。皆が救われたのは私の力じゃないわよ。キノ王国の巫女たちが懸命に癒しているからね」

国中を襲ったはやり病で多くの人が犠牲になることを、誰もが覚悟した。街の神殿の中級巫女たちが治療にあたっていたけれど、一日に癒せる人数に限りがあり、病の広がりを食い止められずにいた。……それどころか、無理に治療にあたって命を落とす巫女もいた……

もつと早く、魔力を回復させる方法を発見できていたら、あの街の神父様の妻、シヤナ巫女も死なずにすんだかもしれない。形見にもらった「巫女の花」という赤いかわいい花の刺繍が施されたハンカチを、ポケットの中で握りしめる。

巫女が巫女を癒せば、魔力が回復する。巫女が二人いれば、お互いに癒しながら何人も癒せる——。その方法を発見したのは私かもしれないけれど、そのおかげで国が救われたとは思わない。

私は、下級巫女で癒しの力は弱い。「行き遅れ」と言われるまで長年力を使い続けて、能力が上がったので少しは役に立てたと思う。けれど、他の巫女がいなければ救えなかった。皆のおかげだ。

もちろん聖女候補であるルーシエも必死に人々を癒してきた。

「私たちが行く、ミーサウ王国には聖女様がいらないんだよね？ 巫女だけじゃ病を収束させられないのかな？」

長年国境で睨み合っていた敵国ミーサウ王国は、聖女不在の国と言われている。

「巫女の数も少ないと聞いているけれど、どれくらいいるんだろう……」

巫女が巫女を癒して魔力を回復するという方法を伝えてもそれを実行するだけの巫女がいらない。だから、はやり病をどうすることもできずに戦争の降伏状が送られてきたのだ。降伏の条件は「聖女を送ること」だ。

しかしキノ王国としても聖女を渡すわけにはいかない。そこで、聖女候補であるルーシエを送ることにした。まだ、十三歳と幼いルーシエを。私はルーシエを助けたいと思い、一緒にミーサウ王国へ行くことを決めたのだ。

「大丈夫。たとえ巫女の数が少なくても、ハナ巫女がいれば百人力だもんっ！」

ルーシエが鼻息荒く訴える。

ルーシエが私のことをやたらと持ち上げるのは、一緒にミーサウ王国へと行くことを感謝しているからだろうか。

「あ、王都を出たようね」

カーテンの隙間から外を確認する。周りに建物はなく、王都を取り囲む城壁の外へと出たことが分かる。

「ミーサウ王国まで何日かかるんだったかな」

私の言葉に、ルーシエがぐくりと小さく唾をのむ。

そして急に、下を向いて暗い顔になってしまった。やはりミーサウ王国へ行くのが怖いのだろうか。

しばらくして、何かを決心したように顔を上げた。

「ハナ巫女、今ならまだ引き返せる。私のために、ハナ巫女までミーサウ王国へ行く必要は——」

そう言いながらも、ルーシエの手が小刻みに震えているのが見える。

「私、ルーシエが付いてくるなど言っても、ミーサウ王国へ行くわよ？ だって、ミーサウ王国の人たちはやはり病で苦しんでいるんでしょ？ 私、できるだけ多くの人を救いたいもの」

にこりと笑ってみせると、ルーシエがほっとしたように力を抜いた。

「ありがとう、ハナ巫女」

隣に座るルーシエの肩をぼんつと軽く叩きながら、今朝のことを思い出していた。

ルーシエの護衛に付くと紹介されたのは、六名の兵だった。

聖女候補の移動だというのに、馬車も二台だけ。

『何百人と護衛兵を引き連れて行って身構えさせないよう、精銳を用意した』と、眼鏡の瘦せた文官から説明を受けた。

確かに、いくら戦争終結の合意がなされたとしても、敵国の兵が大量に国に向かってくれば不安になるかもしれない。でも、六人はさすがに少なすぎないだろうか。大丈夫かなあ。

少し不安を覚える中、王城の裏口からひっそりと出発することになった。

そう、ひっそり、こっそり。聖女候補とはいえ、まだはやり病が猛威を振るっているさなか、国民を癒しめせずに敵国へ行くことに反対する人もいるだろうという配慮だ。

……と、文官が言っていた。確かにそう言われると辻褃は合うんだけど。

キノ王国では近くはやり病は収束し、軍備を整えられる。

一方ミーサウ王国は、巫女がいなくてはやり病の収束のめどが立たず、キノ王国よりも被害が甚大になる可能性が高い。

戦争を再開すれば、キノ王国の勝利は固い。となれば、戦争再開を望むキノ王国の勢力が、「友好の証に送った聖女候補様を死なせるとは許せない」と再び戦火を起こす理由にしたいと思ってるのかもとか。そのためにルーシエを犠牲にするつもりで秘密裏に出立させたわけじゃないよねとか、つい、いろいろ考えちゃって、なかなか文官の人が言っていることが信じられないんだよねえ。実際、特に騒がれることもなく確かに王都は抜けたけれど……

と、こうしちゃいられない。街道を進んでいる間にすることがあったんだ。

「さあ、ルーシエ。服を取り換えましょう」

私の言葉にルーシエがちよっと困った顔をする。

「ハナ巫女……本当に入れ替わるの？」

聖女の装束は特別にあつらえられたものだ。金糸で刺繍が施された白い膝丈のベストを、青い帯で結ぶ。中の服はどのようなものでもいいのだけれど、ベストと帯が聖女の目印だ。候補ではある

けれども、聖女としてミーサウ王国へ行くルーシエのためにこの装束しょうそくが用意されていた。

「ええ。道中、聖女をお守りするために身代わりになっていると言えば、護衛たちも文句はないでしょう？ 幸い六人しか護衛はいないし」

いつも身につけているエプロンを外しながら、ルーシエの顔を見る。

「でも、もしかしたら……距離を取って他にも護衛が付いているかも」

なるほど、旅人のふりをして付いている護衛……うーん、確かにあるかもしれないけれど。

「まあ、何か聞かれたらきちんと説明すればいいし。気にしない、気にしない」

きつと、ミーサウ王国ではルーシエの顔は誰も知らないだろう。それに、私の方が年齢的に聖女っぽい。……ああ、ちよつと年は取りすぎてるけれど、見た目が明らかにまだ子供なルーシエよりはマシなはずだ。

聖女の命を狙う者がいたら、装束しょうそくを目印に私を狙ってくるだろう。

もし、私が傷ついたとしても……

「即死じゃなきゃ、ルーシエが癒いやしてくれるものね」

よほど腕のよい暗殺者でもなければ即死になることはないよね？

「ハ、ハナ巫女、何を言っ……まさか、私が狙われると思っ……？ 聖女扱いされるのが苦手だから身代わりをしてくれるんじゃない？」

おっと。ついうっかり口を滑らせてしまった。

「違う違う。もし、万が一、そういうことがあったとしたら……、護衛を納得させられる理由

としてね？」

ルーシエがまだ納得していない顔を見せる。

「あと、えーつと、宰相と陛下の言葉、覚えてる？ 下級巫女なら惜しくないみたいなこと言っただでしょ？ 私が下級巫女だっ……というのは、護衛たちも知ってるけれど、もしかすると彼らもそう思ってるかもしれない？ 賊に襲われた時に、聖女を優先して守るのは当たり前で、私はすぐに捨てられても仕方がないと思ってる。でもこの服着てたらさ、形だけでも私を守らないと賊に怪しまれちゃうから、結果として私も守ってもらえるかもしれないじゃない？」

と、とっさに思いついた言い訳を話す。

「見せてあげればいいっ」

突然、ルーシエが大きな声を出した。

「ハナ巫女が、私よりずっとずっとすごい巫女だっ……見せてやればいいのよっ！」

ああ、私が軽んじられていることに怒ったのか。

「ありがとう、ルーシエ。まあ、とにかく……ミーサウ王国に入るまではのんびりしましょう。」

ミーサウ王国に入ったら——」

ミーサウ王国との国境を越えた後のことを考えると、胸がぎゅつと締め付けられる。

聖女不在で、巫女がほとんどいない国。

過去にミーサウ王国では、巫女を戦争の道具にするため力を使い続けさせた。巫女が子供を生まなかつたことで巫女の数は減り、今度は慌てて巫女に無理に子供を生ませた。だけれど巫女が生ま

れることはなかった。だから今では巫女はほとんどいないと、ガルン隊長が言っていた。

キノ王国と違い、街の神殿に巫女が常住していることはないだろう。苦しんでいる人たちのいる街や村を素通りできるだろうか……

聖女の装束しやうそくを身につけてから、ふと考える。ひつつめた髪に、大きな眼鏡とマスクはどうしようか。さすがに聖女っぽくないからやめた方がいい？ でもやはり病やまいがうつるといけないし、外さなくても大丈夫よね？

「その恰好は？」

しばらくして休憩を取る場所で馬車を降りると、護衛兵たちに怪訝けげんな顔をされた。

「……と、いうわけなので服を入れ替えたんです」と、馬車の中で考えた話をする、六人のリーダーらしき四十歳前後の兵が納得したように頷いた。一人だけ騎士の恰好をしているこの兵は、確かダージリ隊長と呼ばれていた。……隊長……

同じ隊長でも、ずいぶんガルン隊長とは風貌が違う。ガルン隊長は長身で、鍛えあげた筋肉が全身を覆っていた。騎士だというのに髪も整えず、無精ひげもそのままのことも多かった。それは、身なりを整えるよりも優先するべきことがたくさんあったからなのだと今では分かる。

一方、目の前に立つダージリ隊長は、薄くなった髪の毛を整髪料できっちり整え、口ひげを丁寧に作り、香水までふりかけている。とても鍛えているとは思えないひよろりとした体つきだけれど、隊長を任せられるくらいだからそれなりの実力はあるのかな？

「確かに、そのほうが守りやすいかもしれないな。おい、事情を説明してこい」

説明？ 命じられた兵が馬に乗り、どこかへ駆けていった。

「やっぱり、他にも護衛がいるみたいね」

ルーシエが声を潜ひそめる。そうなのかな。……つてことは、ルーシエを犠牲にするつもりはない？ いやいや、まだ油断はできないよね。

「どうぞ」

護衛兵の一人が、水分の多いフルーツを差し出してくれる。侍女を一人も連れていないので、お茶一つ出ない。……というか、私がやってもいいんだけど、聖女のふりをした今、私が率先して動いているのを第三者に見られたらおかしいよね。

「ありがとう」

マスクを外して果物に歯を立てようとしたところで、後ろから伸びてきた手にマスクを戻された。「ハナ巫女……駄目ですよ。人前で顔をさらしては」

ん？ この声……？

「マーティー、どうしてあなたが！」

振り返ればマーティーがいた。

隊で上位の実力者に与えられる称号——ナンバーズの一人で、槍の三番手だ。

マーティーは駐屯地の兵で、騎士になる試験を受けるために王都に向かったんだよね。やはり病やまいで試験はどうなるか分からないとはいえ、なんで、ミーサウ王国へ向かう私たちのところにいるの？

「マーティー、だってあなたに、ガルン隊長宛の手紙を持って行ってもらったわよね？ そのままガルン隊長のもとに戻るように、手紙に書いたはずだけど……」

「ただ、マーティーは私の言葉を無視して、ダージリ隊長に向き直る。」

「お前は？ 追加の護衛か？」

「ダージリ隊長がマーティーに話しかけた。」

「マーティーと申します。僕は聖女一行の護衛ではありませんので、ダージリ隊長の指揮下には入りません」

「何だと？ じゃあ、何しに来た？」

「マーティーが私の顔を見る。無造作に後ろで束ねた黒い髪。ああ、マーティーも髪を整えるよりも訓練していた方がいいというタイプなのかもしれないなあ。でも長い前髪は少し切ったほうがいいですよ。視力が悪くなるから。」

「やがて、涼やかな目がふつと優しく笑う。」

「僕は、ハナ巫女の護衛です」

「何を？ 下級巫女に護衛が付くなど聞いたこともない！」

「ダージリ隊長がマーティーを睨みつけた。」

「誰の手の者だ？ 同行を許されるとでも思っているのか？」

「ダージリ隊長が腰に下げた短剣の柄に手をかける。」

すると、マーティーが手にしていた短剣を鞘ごとダージリ隊長へ差し向けた。

「僕は、ガルン隊長——ファシル侯爵家より遣わされました。デイリル領をはやり病から救った、

デイリルの聖女ともいべきハナ巫女を守るために」

「うひゃー。マーティー、ちよつと、マーティー。」

「デイリルの聖女って何、それ。」

「領都を救ったのは、私の力じゃなくて、皆が頑張ったからだよ？」

確かに、巫女が巫女を癒すという方法を伝えたから助かったということはあるだろう。だけれど、実際に癒しを頑張ったのは、領都の中級巫女と見習い巫女たちだ。それから初めはやる気がなかった上級巫女のピオリヌ様とシャンティール様のお二人の力も、なくてはならないものだったし。それに、同じ下級巫女であるマリーゼも頑張った。決して私だけがデイリル領を救ったわけではない。

「下級巫女がデイリルの聖女？ ふつ、おかしい話だな？ それを信じると言うのか？」
「ですよ、分かってくれますか？」

「帰れ。帰ってファシル侯爵家に伝える。下級巫女に護衛はいらない……と」

「ダージリ隊長の言葉を聞いて、マーティーは短剣を引き抜いた。」

「マーティー何をやるのっ！」

「ズシュッと、嫌な音が聞こえた。」

「マーティーの持つ短剣が、マーティーの腹に突き立つ。」

「な、なんてことを！ マーティー！」

自分で自分のお腹を刺すなんて！

「何を考えているっ！ 正気か？」

ダージリ隊長も理解しがたいと言わんばかりに動揺した声を出す。

「正気ですよ。ハナ巫女の護衛として認めてもらうには、これが一番手っ取り早いと思ったから」

【癒し】

なるべく血が流れないように、短剣を引き抜くタイミングで癒しを施す。

それでも、服の穴の開いたあたりは血でかなり汚れてしまった。

「ふっ。ハナ巫女の癒しは気持ちがいい……」

「バカっ！ 何言ってるの！ 自分で自分を傷つけるなんて、もう一度同じことをしたら、今度は癒してあげませんかね！」

私が怒っているのに、マーティーは笑っている。

「知ってる。そう言っつて、ハナ巫女はいつも癒してくれるんだ」

「マ、マーティー……！」

もしかして、癒さないと言いつつ癒してしまうって見抜かれてるから、ガルン隊長も懲りずに怪我をこさえてくるんだろうか？

マーティーは制服のボタンを外し、短剣を突き刺した腹をダージリ隊長に見せた。

「彼女は下級巫女ですが、護衛が必要な、大切な巫女って分かってもらえました？」

マーティーが挑発的にダージリ隊長に言葉を発する。

「嘘だと思っなら、試してみますか？」

マーティーが血まみれになっている短剣を拾い、ダージリ隊長に刃先を向けた。

「これだけの力……下級巫女というのは、嘘か……。どういふつもりだ。何を考えている、ファシル侯爵家は……」

「何も考えていませんよ。大切だから、守る。それだけです」

マーティーの言葉にも、ダージリ隊長は嘘をつけという疑いの目を向ける。

「仕方がありません。こんなことで信じてもらおうなんて思っていますませんが、騎士として中央で働くあなたならば、こちらのほうが説得力ありますか？」

マーティーが私の顔から眼鏡とマスクを外して、すぐに戻した。

するとダージリ隊長は驚いた顔をした後、マーティーの肩をぼんぼんと叩く。

「了解した。マーティーと言ったか。血まみれでうろつかれては困る。着替えて護衛に加われ」

あれ？ なぜか説得されちゃったけど……。あの一瞬で何があったの？

「ふふふ、ふふふふっ」

ふと側を見ると、ルーシェが笑っている。え、面白いことあった？

「ハナ巫女、兵服を調達して着替えなければいけません。少し離れますが、すぐにハナ巫女のもとに戻ります」

と、マーティーに話しかけられる。

「ちょっと、待って、マーティー。護衛って、ガルン隊長が私の護衛に行けって言ったの？ だっ

て、手紙には……」

駐屯地の仕事を辞めて王都で働きます。今までありがとうございました——と、書いたはずだ。私らしいと思われるように、「王都で苦しんでいる人たちを見捨てて駐屯地へ戻るなんてできません。勝手を言っでごめんなさい」と理由も書いた。

「手紙に何が書いてあったのか僕は知りませんが、手紙を見たガルン隊長はすぐに『よかったな』とつぶやいていました」

よかったな？ 新しいやりがいを見つけたから？

「あと、『アルフォードと会って、うまくいったのか』……と」
は？ うまく？

「アルフォード？ ……えっと、氷の將軍のことだよ？ 会ってないけど」

王都の人たちを見捨てられないというのは言い訳で、氷の將軍と結婚するから駐屯地を辞めると思われたってこと？ なんて、そんな斜め上の発想になるの？

まあ確かに、行き遅れだと言われる二十四歳にもなって結婚しない理由として、女性たちのあこがれのある「氷の將軍」が好きだからと言っていた。けれど本当は、恋をして結ばれると巫女は力を失ってしまうから、誰とも結婚したくなかったんだだけだね。周りが「結婚しないのか」とうるさくなってきたころから、面倒くさくなつて氷の將軍を言い訳に使っている。とはいえ、行き遅れ下級巫女の私が、氷の將軍のような雲の上の人間を射止められるわけじゃないじゃないねえ？

「え？ マリーゼ巫女に頼んで、アルフォード様と会う機会を作ってもらったんですね？ ガル

ン隊長が言っていましたけど？」

「会う機会？ マリーゼは、確かに『なんとかします』と言っただけ……」

まさか、ガルン隊長に頼んでいたとは……。どう言っただけ頼んだんだろう。

というか、結局アルフォード様とは会ってないけど……と首を傾げる。

「それで、その……すみません、ハナ巫女っ！」

急にマリーゼが頭を下げた。

「これ、本当はガルン隊長からハナ巫女に渡してくれと頼まれたもので……」

マリーゼが先ほど腹を貫いた短剣を私に差し出した。

「ファシル侯爵家の紋章が刻まれているから、何かあれば兵や騎士や貴族にこれを見せれば役に立つかもと……お守り代わりになって……」

「お守り……」

お守りに短剣……ふふ、ガルン隊長らしい。

お守りって言ったら、女性が身につけやすいように、アクセサリー類にするものなんだけどね。

「それを渡しに城に戻ったら、ハナ巫女が聖女候補とともにミーサウ王国に旅立ったと聞いて……すぐに追いかけてきたんです」

そうなのか。あれ？ そのマリーゼの言い方からすると……

「私の護衛をしろと、ガルン隊長に言われてきたわけじゃないの？」

それどころか、ガルン隊長はまだ私が王城にいると思ってる？

「あー……」

マーティーがばつの悪そうな顔で頭をかいた。

「僕は、その、ガルン隊長とハナ巫女の連絡係の任を解かれていないので、仕事を続けるためにはハナ巫女のそばにいないと、その……」

うん、そういう意味では任務違反じゃないというのは、分かったけど……

「マーティーは騎士選抜試験を受けるために王都へ来たんでしょ？ そっちに集中しなきゃ。私は大丈夫だから」

「僕が大丈夫じゃない。ハナ巫女を一人でミーサウ王国へ行かせるなんて」

「一人じゃないよ？ ルーシエも護衛もいるから」

「護衛は聖女候補であるルーシエ様の護衛でしょう！ ハナ巫女の護衛はいない」

もう、ああ言えばこう言う。どうしたらいいんだろう。

困り果てて、ルーシエの顔を見る。

「私、マーティーがいてくれた方がいいと思う。だって、知らない人ばかりの護衛より、信用できる人がいてくれた方が……」

ルーシエの言葉にはつとずする。確かにそうかもしれない。もし、ルーシエを犠牲にするつもりであれば、護衛が本当に守ってくれるのかも怪しい。

だけど……

「マーティー、本当にいいの？ 騎士になるチャンスなのに……」

「ハナ巫女、騎士になることよりも大切なことは世の中にいくらでもありますよ」

そうだけど。でも、私のわがままで……。私がルーシエを守りたいと、ミーサウ王国に行くことで、マーティーの未来を棒に振らせてしまうようなことをしてもいいんだろうか。

「でも……」

「じゃあ、こうしましょう。ハナ巫女」

マーティーが膝をついて騎士の礼を取る。

「ハナ巫女……いいえ、ハナ聖女。道中は、ハナ聖女直属の騎士に任命していただけますか。あなただけのナイトに」

「私の……ナイト……」

馬鹿ね。マーティー。私の騎士になったって、何の得にもならないのに。なんで、そこまでしてくれるんだろう。

「それ、いい考えね！ 聖女は聖女近衛隊として何人か取り立てることができるって聞いたことがあるわ。騎士採用試験を受けなくても騎士になる道はある」

ルーシエが楽しそうな声をあげた。

「そうなの？」

「うん。私が帰国して聖女になったら、絶対マーティーを騎士に推挙するって約束する」

「ありがとう、ルーシエ！」

ぎゅっとルーシエを抱きしめる。

——聖女になりたくないと言っていたルーシエが、こうして聖女になったらという前向きな話をしてくれるようになった。……よかった。

「あ、いや、だから、僕は別に騎士になりたかったわけでは……もごもご」
なんかマーティーが言っている。

よく聞こえなくて聞き返そうとしたけれど、出発の時刻になったので会話を中断。マーティーは馬に、私とルーシエは馬車に乗り込んだ。

王都から六日かけて、国境へと到着した。

途中で通りすぎた街の様子は落ち着いていた。中級巫女と見習い巫女の連携で死者を増やさずにするんでいることが、その理由なんだろう。

よかった。私たちが伝えた方法は、きちんと国中に行き届いて実践されているんだ。

約束の時間になると、国境の向こう側にミーサウ王国の騎士服に身を包んだ少年が一人現れた。

「ようこそ、お越しくれました」

騎士の最上礼を取り、片膝をつき少年を見ながら馬車を降りる。

「おい、お前一人か？ キノ王国の大切な聖女の出迎えに子供一人をよこすなど、バカにしておるのか！」

ダージリ隊長が、騎士服の少年にすごんでみせる。

「いえ、滅相もございません。あちらに、聖女様のお供をさせていただく者が控えております」

少年が示した場所には、見える範囲だけでも大きな馬車が五台も並んでいた。

「聖女様のお荷物を積み替えさせていたいただきたいのですが、荷馬車はどちらに？」

少年の言葉に、ダージリ隊長はキノ王国側には一台しか馬車がないことを馬鹿にされたと受け取つたらしい。顔を真っ赤にして怒鳴った。

「ここから先は、ミーサウ王国が聖女様のすべての面倒を見る約束で、こちらで荷物を用意する必要があるなど聞いていない！ それよりも、お前のような少年兵を代表に据えるなど、何を考えているのか」

少年兵だと馬鹿にした言葉にも、少年は平然とした顔をして頭を下げた。

「聖女様、お許しください。動ける人間の中で、一番位が高いのが僕でしたので」

少年がダージリ隊長ではなく、私に話しかける。

見た目は十五歳くらいだけど、やりとりを聞いているともう少し年上にも感じる。サラサラの薄茶色の髪。意思の強そうな立派な眉と優しそうなこげ茶の瞳を持つ、美少年だ。

無視されたような形になったダージリ隊長がさらに怒りをにじませ、少年にあざけりの言葉を投げた。

「はははっ、よっぽどミーサウ王国は人材不足と見える。こんな子供が、一番位が高いだと。これじゃあ、騎士全体の能力も知れたものだな！ 聖女を遣わせてまで戦争を終わらせなくて、そんな弱体化した国など——」

うっわー、ダージリ隊長、いくら相手が子供だからって……

「ダージリ隊長、陛下のお決めになったことを批判するような発言はお控えになったほうがよろしいかと」

マーティーがダージリ隊長の背後に回り、小さな声でささやく。

そのタイミングで、私は聖女として挨拶あいさつをする。

「もう、聞き及んでいるかとは思いますが、私は聖女ではなく聖女候補です。こちらは私の補佐をしてくれるルーシエです。それから、私の護衛ナイトのマーティー」

ルーシエとマーティーの紹介もしておく。あえて「護衛ナイト」と言ったのは、失礼なことを言ったダージリ隊長とは別であることを強調したかったから。

なるべくミーサウとも仲良くできたらいいと思う。わざわざ憎しみや戦争を繰り返すような感情を出す必要はない。

「自己紹介が遅れ失礼いたしました。僕は、騎士隊長代理としてお迎えの任を賜たまった、イシュル・デイウ・ミーサウと申します。イシュルとお呼びください」

「名前にミーサウが……」

国の名前が名前に入っているということは……

「はい。第四王子ですので。兄が即位した後、王家を出て公爵家を興おこせば名前からミーサウは外れますが」

お、お、お、王子？

びっくり仰天。王子がお出迎えにつ！ マスクと眼鏡で顔が隠れていてよかった。もう、なんて

いうか、絶対驚きのあまり間抜け顔している自信がある。

驚いたのは私だけではなかったようだ。

さんざん子供供とバカにした発言をしていたダージリ隊長が、真っ青になって震えている。

「では、行きましょう。聖女様、お手をどうぞ」

イシュル殿下が騎士らしい美しい所作で手を差し伸べてくれた。

身長は私よりも十センチくらい低い。キノ王国と同じであれば十五歳から騎士になれるはずだから、そのくらいの年齢ってことだね。

「マーティーみたい」

ふと、マーティーの顔を見て思い出し笑いをする。

「え？」

マーティーが突然名前を出されて驚きの声をあげる。

「僕と、マーティーは似ていますか？」

イシュル殿下も不思議に思ったのか、首を傾げる。

「ご、ごめんなさい。あの、マーティーも兵になりたてのころは、私より背が低かったんです。だけれど、一年でぐんぐん背が伸び始めて、今ではこんなに大きくなっちゃって感慨深くなってまってる」

ガルン隊長のように、がっしりした体つきではないものの、身長はかなり高い方だ。首が痛くなるほど見上げないといけない。



「それは似てると言われて嬉しいです。マーティーのように背が伸びるかもしれないってことですよね」

イシュル殿下が笑ってマーティーを見た。

「お、恐れ多いことです……」

マーティーが困った顔をする。

はい。私も恐れ多いです。目の前に差し出された王子の手を取るなんて……

「イシュル殿下。先ほども申しましたが、私は聖女候補ですので、聖女様ほど位は高くはなく……」
「それどころか、本当は聖女候補の影武者の下級巫女だからね。王族を前に言葉を発することすら本来ならありえないこと……」

そう言うと、イシュル殿下は首を横に振った。

「一歩ミーサウ王国に入れば、聖女様です。我々にとっては、唯一無二のお方です」

「唯一無二……」

イシュル殿下の言葉に、ルーシエがほおを染めた。

あ、そうだね。私じゃなくて、本当はルーシエのことを言っているんだもん。私がいかに謙遜しすぎると、彼女の立場を貶めることになるわけだ。反省です。

ルーシエの身を守るには、聖女候補でも大切にされる必要がある。

「ありがとうございます」

というわけで、素直にイシュル殿下の手を取り、国境を越えた。

「くれぐれも、キノ王国の大切な聖女……頼みましたよ」

ダージリ隊長が含みのある言葉をかけてきた。単に最後に強がっただけなのか、それとも何か深い意味があるのか……

イシュル殿下に手を引かれ連れていかれたのは、五台の馬車とは距離を置いて止められていた、通常の倍ほどの大きさがある馬車だ。今まで使っていたのは、向かい合って座る席があるだけの造りのものだったが、これは乗合馬車のように何十人か乗れそうなサイズ。

その馬車のドアを、イシュル殿下が自ら開く。

「申し訳ない。よもや侍女を一人もお連れしていないとは思わず……。我が国で用意した侍女も、その……」

殿下が言葉を濁した。その後続く言葉は何なの？ まさか……？

距離を置いて止めてある五台の馬車を振り返る。なぜ、距離を置いているのか。

なぜ、国境に殿下一人が迎えに来たのか。

王都を出発した時には「症状のなかった者」がまざっていたとしたら……

「ルーシエ、行きましょう」

五台の馬車に向かつて歩を進める。

「あ、ハナみ……ハナ様！」

ルーシエが慌てて付いてくる。

「ま、待ってください、そちらに行つてはいけません。聖女様、そちらの馬車には……っ！」

イシュル殿下が止めるのも聞かずにずんずん歩いて行き、一番手前に止まっていた馬車に近づく。この馬車もまた、乗合馬車のような大きさだ。

馬車のドアを開く。中の造りは簡素で、長椅子がいくつか設置されているだけだった。もともと乗合馬車だったのかもしれない。

椅子の上と、椅子と椅子の間の隙間に、人が所狭しと寝かせられている。

「駄目です、聖女様にも病が……」

殿下が追いつき、私の肩に触れた。

「聖女が、聖女の仕事をするだけです」

にこりと笑って見せてから、馬車に乗り込む。

殿下が馬車の入り口に姿を現し、見知らぬ私が乗り込んできたというのに、寝かされている人たちは何の反応も示さない。

かなりひどい状態だ。でも、大丈夫。右手を一番手前の患者の胸に当てる。

【癒し】を……

ふわりと、周りの空気が少し温まったような感じがする。

手を当てている女性の顔色がみるみるよくなっていく。荒かった呼吸も落ち着き、ゆつくりと目を開けた。

「もう大丈夫ですよ」

「あ……」

女性の口からかすれた声が漏れる。いったいつからこの状態だったのだろう。水も飲んでいなかったに違いない。ちよつと振り返ると、馬車の入り口まで付いてきていたマーティと目が合う。すぐに察したのか、マーティが小さく頷いて動き始めた。大丈夫。必要なことは、王都でもいろいろと奮闘していたマーティがやってくれる。私は、患者を癒すことに専念しよう。ルーシエも、一刻を争う患者に癒しを施し始めた。

二人目、三人目と、手前の人から順に癒していく。女性も男性も同じ馬車に寝かされていたが、分ける余裕はなかったのだろう。それとも、病状の進行具合で分けてあるのか。

癒したのは十名。うん。まだ魔力は大丈夫。

高熱で息も絶え絶えになっていた者たちは、突然体が楽になったことに驚きを隠さないでいた。

「さあ、次の馬車へ行きましょう」

次の馬車も同じような感じだった。

さらに十名を癒す。まだ魔力は残っているけれど、次の馬車に向かう途中でルーシエに癒しを頼む。

「ルーシエ、お願い」

「はい、ハナ様。【癒し】」

よし。魔力が一気に回復した。

イシュル殿下はもう止めようとせず、茫然と五台の馬車を移動する私たちを見ていた。

「聖女……様」

イシュル殿下のつぶやきが聞こえる。勝手にする私に対するあきらめの声だろうか。

はっと、我に返る。よく考えたら「王子」の制止を振り切っちゃったよっ。や、やばい？ でも、病人ほうっておけないし……えーっと、うーんと——そう、罪に問われる時は私だけのせいにして、本場の聖女候補のルーシエは関係ないって主張しよう。

五台目の馬車には、寝ている人はいなかった。まだ少しだけ体力に余裕のありそうな人たちが、馬車の壁にもたれて座ったり、椅子に座ったりしている。

隣の人にもたれかかっている人もいることから、単にもう寝かす場所がないだけという可能性もある。二十名といったところか。

そうして癒したのは、全部で六十名。馬車の外にいた健康な人は、五名ほどしかいなかったから、ほとんどの人がはやり病に罹患してしまったんだ。というか、六十名でお出迎えて……キノ王国は護衛が六名しかいなかったから、すごく多い気がするんですが。でもこれが普通だとすると、どれだけキノ王国にひどい扱いをされたのかって……ルーシエが気の毒になる。

最後の馬車での治療を終えて外に出ると、馬車の前には治療が終わった人たちが並んで膝をつき、頭を下げていた。

うっわ、何これ。

「聖女様、ありがとうございます」

先頭にしゃがんでいた、白髪が目立つ男が口を開いた。

「ありがとうございます、聖女様！」

すると、それにならない人々が口々にお礼を述べる。あの、いや、ええ？

「顔を上げてください。えっと、聖女ですから、人を治癒するのは仕事ですので……」

聖女といっても、所詮は力の強い巫女だという認識しか私にはない。

巫女の仕事は、下級だろうが、中級だろうが、上級だろうが……そして聖女だろうが、人を癒すこと。人を救うこと。それだけだ。

「聖女とは、王族専用の巫女様だと……そう聞かされていましたが」

私の目の前に立つイシュル殿下の言葉に、ルーシェが小さな声で話し始める。

「確かに、我が国では巫女の力の強さによって勤務地が異なります……聖女は力が強いため、王都の要人のために城に配置されますので、王族専用と思われがちですが……」

ルーシェが小さくため息をついて続ける。

「実際は、聖女といえども癒せる人数に限りがあり、いざ王族に何かあった時に魔力切れを起こさないために癒しを控えているだけなんです。もつと多くの人が癒せれば……いいえ、もつともつと多くの人を救っている人こそ、真の聖女。王族専用の巫女を聖女なんて呼ぶ必要などないのです。だけれど、ハナ様は違います。王族専用の巫女ではありませんん！」

ルーシェが悔しさというか、自分の力不足にイラついているような顔をする。

「そうですね。王族専用の巫女ではなく、本物の聖女は……単なる役職ではない。聖女候補だと言っていたが……キノ王国は我らに本物の聖女を遣わしてくださいとお願いしたことですね」

イシュル殿下がニコニコと笑いながら、膝を折る。ちよ、一国の王子が、私に対して膝を折るな

んて！ いや、今の私は聖女候補の代わりだ。ルーシェを大事にしてくれるってことなんだろう。

イシュル殿下は、王族だからって権力で何もかも思い通りにしようとしなない、いい子なのかな。

「ありがとうございます。皆を救ってください、どう感謝の気持ちを表せばいいのか……」

殿下は、家臣のために頭を下げているんだ。いえ、国民のために。戦争の降伏条件として聖女を派遣してほしいと言ったのは、王族のためではなく国民のためということ？

「我々は、聖女様に心からお伝えしたいと思います」

仕える？ 殿下が？ 違うよね、聖女が仕えるんだよね？

混乱する私に殿下が頭を下げた後、後ろにいる女性に目配せした。

「はい、私も——聖女様のためなら何だっていました。メイスーと申します。侍女として何なりとお申し付けください」

私と同じ、二十三、四歳の落ち着いた雰囲気的女性だ。話しやすそうかな。

「ありがとうございます。皆さんよろしくお願ひします。その……立ってください。早速出発しましょう」

と、声をかけると一斉に皆が動き出した。馬車の中でぐったりしていた人たちだけれど、もともとは優秀なのだろう。きびきびと自分のすべきことをし始める。

そうして、ガタガタと馬車に揺られて一時間。

馬車の揺れ方が変わった。土の上から、石畳の上を走る揺れ方になったのだ。窓から外を見ると、

街の中に入ったことが分かった。

馬車から見える街並みは、キノ王国と少し趣が違ふ。ああ、異国に来たんだなと実感した。キノ王国では石造りの建物が中心だが、ミーサウでは白壁の建物が多い。壁に土を塗って作っていると聞いたことがある。

しかし、こんなに大勢のお迎えが必要だったのかな？ 私とルーシェが乗っている馬車の後ろには、五人の侍女が乗る馬車。その後ろに荷物の積まれた馬車が一台。三台で進むことになった。病人がいた五台の馬車は、置いていくようだ。

私の乗っている馬車の前後左右に、それぞれ馬に乗った五名ずつの護衛。殿下も護衛にまじっている。残りの護衛はどこにいるのかな？ 馬車の後ろ？

窓の外から顔を出すのとはしたくないかと思っただけで、好奇心には負けました。少しだけ馬車の窓から顔を出して後ろを確認する。

「あれ？ いない」

となると、前？

前方を見る。

「いた」

かなり先の方で護衛たちが街の人たちに何か話をしている。

え？ 街の人たち？ もう一度後ろを見る。通ってきた道に人の姿はない。

……護衛たちは、馬車が通るために人にどいてもらっているということ？ まあ、確かに子供が飛び出して馬車にひかれたりしたら大変だけど。それにしても、街道の脇に寄せず、姿が見えな

くなるところまで行かせるのはなぜ？ 暗殺者の心配をしているとか？

「ねえ、ハナ巫女……街の人たちの姿が見えないけど、どうしたんだろう」

逆の窓から外を見ていたルーシェが尋ねてきた。

「うん、なんか護衛たちがずっと前の方で、街の人たちに道をあけさせてるみたい」

「道をあけさせてる？ 隠しているわけじゃなくて？」

「隠すって？ 私たちを？ 聖女が通るのを隠すの？」

それとも、私たちから街の人たちを隠している……？

もう一度窓から外を見る。ずっと先の護衛が、街の人を背負って横道に入っていくのが見えた。

「隠しているんだ……。ルーシェの言う通り……」

窓から顔を出したまま思わず叫んだ。

「馬車を止めて！ 止めてーっ！」

馬車が止まると、イシユル殿下がすぐに近づいてきた。

「どうかされましたか、聖女様」

どうしたもこうしたもない。ああ、怒っても仕方がないんだけど、とても嫌な気分だ。

通行の邪魔になるといけないから、道からどいてもらうところまでは分かる。だが、これはそんな理由ではなかった。

……人の姿が見えない……。それをこんなに怖いと思ったことはない。

馬車の扉を開ける。

「イシュル殿下、街の人たちはどこですか？ ……病気の人たちは？ 神殿ですか？」
そう問うと、イシュル殿下が首を傾げる。

「神殿？ いえ、亡くなった者たちは街外れの墓地に運ばれます。司祭がそちらに向かって祈りをささげるので神殿にはおりません」

は？ 亡くなった者？

「亡くなった者ではなく、今病で苦しんでいる人たちは、どこにいいのか教えてください。神殿でなければ、どこに治療院があるのですか？」

キノ王国では神殿、もしくは神殿に併設されるかたちで治療院がある。どの街もそれは同じだ。

街のほぼ中央にあり、どこに住んでも治療を受けに行きやすいようになっていてる。

「治療院は……ありませんので、それぞれが自宅で静養しているかと」

「治療院がない？」

意味が分からず、啞然とすること数秒。なぜと尋ねようとして、ガルン隊長の話を思い出す。

巫女が……巫女がないからだ。まったくいけないわけじゃないだろうけれど、地方の街にまで配置できるだけの巫女がないんだ。

だけど、巫女がいなくなつて、怪我や病気の人に処置をする者は必要じゃないのだろうか。

冷やせば楽になるとか、動かさないように固定したほうがいいのか、咳には大根をすりおろしてはちみつに混ぜたものを飲ませると楽になるとか……そういう、巫女の癒し以外の部分で患者にできることはいくらだつてあるのに。

それらの知識は、私は巫女見習いの時に神殿で教えられた。だから知っている。

……巫女がないということは、癒しを行ってもらえないというだけでなく、こういう知識も継承されていかないということなの？

「殿下、私の顔、どう思います？」

「え？ あの、聖女様の、その……」

突然尋ねられて、イシュル殿下は返答に困っている。そりゃそうだろう。顔を覆う大きなマスクに、大きな眼鏡。髪の毛はひつつめて、見た目がよいとは言いがたい。

「マスクは、病気の罹患を防ぐのに効果があります。鼻や口から病が入ってくることもあるので、患者を触った手でそこに触れないように。同じく目の粘膜から入り込む病もあります。うっかり目をこすってしまわないように、飛び散った血が入らないように……眼鏡が役に立つのです。多くの患者と接して巫女が罹患し、それに気付かないまま別の患者にうつしてしまうことがないよう、このような姿をしています」

とはいえ、実際ここまでしている巫女は少ないんだけどね。私の場合は別の理由もあるので……顔色が悪いのを隠すとか、目がかゆくなるのを防ぐとか……

「そうだったのですか！ 失礼いたしました。その、顔を隠されているのは何か事情があるからなのだと思いますが……そもそも隠しているのではなく、隠れてしまっているのですね。お恥ずかしながら、ミーサウ王国では過去の過ちにより、巫女も、巫女の持つ知識までもが失われてしまいました。無知であることをお許しください」

やはり、そうか。私たちが神殿で見習い巫女の時に教えてもらうようなことすら、伝わっていないんだ。

「ルーシエ、お願いできる？」

ルーシエには、私が何をしようとしているのかすぐに伝わったようだ。

「もちろんです。ハナ様」

一人じゃ無理。でも、ルーシエと二人ならば。

「街の中央に広場のような場所はありませんか？ 神殿はどこに？」

私の質問に、イシユル殿下に代わって護衛の一人が答える。

「もう少し進んだところが中央広場です。神殿は広場の西側にあります」

「では、私とルーシエをそこに連れて行ってください。病人を広場に運んで、動けない人は連れて来るように。動ける人には広場に行くように言ってください。返事すらできない人もいるでしょう。息があれば助けられます。いえ、助けてみせるので、もう駄目だろうなんて判断せず、とにかく連れて来て！」

なるべくたくさんの人に声が届くように大きな声を出す。

すると、続けて殿下の声が鋭く飛んだ。

「聞いたか、すぐに動け。一班は北、二班は南、三班は西、四班は東、五班は中央。六班はそれぞれの連絡と街の人たちに触れて回れ」

「……恐れながら殿下、私の力には限界があります。この国の人たちすべてを救うことはできません。

ん。目の前にいる人しか救えないので……」

苦しい。キノ王国であれば、この方法を伝えるだけで各地にいる中級巫女と巫女見習いが癒しを行えるのに。

「次に訪れる予定の街に先触れを。その周りの町々にも、病人にあらかじめ集まってもらおうように伝えてください……それから、巫女の力を少しでも持っている者はいませんか？ 弱い力でも構いません」

そう問うと、イシユル殿下が首を横に振る。

「弱い力であろうと、我が国には貴重な人材です。十歳で力があると発覚すれば、王都へ送られます。ですから、王都以外には……」

思わず嫌悪感が顔に出ってしまったのだろう。私を見て、イシユル殿下が申し訳なきように頭を下げた。

「確かに、王都にいる僕たち特権階級のみが、巫女の癒しの恩恵を受けていると思われても仕方ありません……」

すると、近くに立っていた侍女のメイスーが慌てて口を開いた。

「ち、違います。確かに、王都に巫女の力のある者は連れていかれますけれど、それは巫女を守るため……あの、私の妹もほんの小さな力ですが、巫女の力があると言われたので王都に行きました。行かないと……小さな力でも欲する、悪い人たちに誘拐される危険があるから」

誘拐？

「巫女の癒しを商売にしている人たちがいて、小さな力だとしても、その……藁にもすがる思いで、人々は救いを求めて大金を積みみます。いい稼ぎになるんです。そういう人たちに、巫女の力があると知られたら……だから、妹も王都に行きました。十歳で一人王都に行かせるのはかわいそうだと思うって、私も付いて行っただけです」

「巫女を守るために……？」

「さすがに王都の警備は厳重です。王都にいれば、守ってもらえます」

「そうか。巫女を王都へ連れて行くのは、守るという意味合いもあるのか。」

「イシュル殿下、頭を上げてください。巫女が足りない現状で、いろいろ大変なことは理解できません。ですが……」

静かに言葉を発しつつ、ごくりと小さく唾を呑み込む。

今、私は、とても大それたことを口にしようとしている。聖女であれば、それほど問題ではないかもしれない。でも、後で偽の聖女だと分かったら、きつと罪に問われるだろう。王子に対して、ただの庶民が言っているいい言葉じゃない。でも、言わなければ。

「どうやらミーサウ王国は、間違ったことばかりしているようですね」

間違っているなど、国策を非難するようなことを言うべきではないとは思っけれど……。でも、このままではミーサウ王国の巫女たちがかわいそうだ。

イシュル殿下を見れば、その顔には怒りではなく戸惑いの色が浮かんでいた。怒っていないことにひとまず胸を撫でおろす。

「病人たちが運ばれてきました」

護衛兵の声にはっとする。そうだ、今は目の前の患者に集中しなければ。

「ルーシエ、行きましよう！」

殿下に一礼して中央広場に向かうと、そこには多くの人が運ばれていた。

「意識のない人から先に癒します。患者を分けてください。意識のない人、幼い子供や高齢の者、意識はあるけれど自分では動けない者——自分で動ける人はあちらに。それから、ずいぶん飲み物を口にしていない者がいたら、水分を取らせてください。コップ一杯の水に塩を一つまみ、はちみつを半さじ。レモンがあれば絞って少し入れて、水は一度沸騰させて冷ましたものを。それを、大鍋で作って配ってください」

治療院では当たり前のように用意されているものだが、ここでは塩やはちみつ調達からしなければならぬようだ。分量に関しても、今の説明では足りないかもしれない。

「ルーシエは分かる？」

「はい、もう学びました。指導してきます」

ルーシエに任せよう。とにかく私は……

【癒し】

生まれて間もない赤ん坊。もう、泣く力もない。だけど、癒しを施せばすぐに呼吸が整った。

「ああ、奇跡が……」

憔悴^{しやうすい}しきつた母親の顔に笑みが浮かぶ。母親にも癒^いしを施^{ほどこ}さなければ。

「あなたにも【癒^いし】を。さあ、水分を取って、この子にお乳をあげてください」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

母親が何度も頭を下げるけれど、答える暇もない。ただその姿を目に焼き付け、よかつたと心の力で力に変える。

【癒^いし】を」

意識のない者には多くの魔力が必要だ。二十名も癒^いすと、魔力が残り少なくなってきたのを感じる。

「そろそろルーシエに頼まなくちゃ……」

きよるきよるとルーシエの姿を探すけれど、目につくところにはいない。

そうだ。キノ王国では当たり前前持っている治療院の知識を、神殿で働く人たちが動ける人たちに教えに行ってもらったんだ。まだ、戻ってこないだろうか。

近くにいたのはイシユル殿下だった。王子をこき使うなんてと思ったけれど、他に知っている顔がないので仕方がない。

「大変申し訳ないのですが、ルーシエを呼んでもらえないでしょうか？」

「分かりました。すぐに」

イシユル殿下は嫌な顔一つせずにルーシエを探しに行ってくれた。うん、これ、偽者^{いつはり}つてばれたら本当に平伏して謝らなくちゃいけないね。いろいろと……。だけど、兵たちに交じって国民に声

をかけながら回っている姿を見るに、イシユル殿下なら許してくれそうな気がする。いい王子だ。

【癒^いし】……」

呼びに行ってもらっている間にも癒^いしを続ける。

まだまだ……。まだ、魔力は残っている。

「い……や……し」

大丈夫……ぶ……まだ、目の前には、生死をさまよっている人が……

呼吸が弱い、一分一秒を争う……ルーシエはまだ？ でも、死なせたくない！

「ああ、聖女様が！ 聖女様！」

「さすがに聖女様でも、これだけのたくさんの人たちを癒^いすのは無理なのか」

「いや、魔力の回復を待たないと駄目なだけで、聖女様は——」

「休ませなければ」

人々の声が遠くに聞こえる。

聖女じゃないよ……

癒^いさなくちゃ……

ああ、駄目、私、何……意識が……

「聖女様、大丈夫？ 聖女様！」

視界に突然、小さな手が伸びてきた。

「駄目！ ユーカ、駄目！」

女の子が私に手を伸ばすのを母親らしき人が止めている。

「聖女様、元気になって」

十歳前後の女の子が、私の額ひたいに手を当てる。

はー、冷たくて気持ちがいい……ん？ あれ？

いつの間にか倒れていたようだ。身を起こす。

「ああ、ユーカ。駄目」

目の前には、母親にぎゅっと抱きしめられているユーカと呼ばれる少女がいた。赤い髪に鼻の頭にそばかすが散った、活発そうな子だ。

「なぜ？ 聖女様は私たちを助けてくれたのに、なぜ私は聖女様を助けちゃ駄目なの？」

そうか……このユーカという子が私を助けてくれたのか。

「ありがとう、ユーカ。癒いよされたわ」

ユーカに微笑んでお礼を言うと、母親が顔色を変えた。

「いえ、違います。ユーカには何の力もありません、ユーカは……ユーカは……」

え？ でも、魔力切れで倒れた私を癒いよしてくれたのはユーカで間違いないと思うのだけれど？

不思議に思う私に、ユーカはほっとしたような顔を見せる。

「よかった。聖女様……」

「あなた、巫女の力があるのね？」

私の問いに、ユーカは頷く。ユーカを抱きしめている母親が首を横に振った。

「違うわよね、ユーカ」

「もういいよ、ママ。隠さなくて……。私、ママと離れて王都に行かなくちゃいけないのは辛いけれど……。でも……」

少女の瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

「皆が死ぬのを見るのはもつと辛い……。私は聖女様ほどの力はないけれど、でも聖女様の疲れを取ってあげられるのなら、それで聖女様が街の人たちを助けてくれるなら……」

少女の気持ちも、母親の気持ちも痛いほど伝わる。

ああ、これはこの国の闇だ。

巫女の歴史は暗い。

大事にされる存在になった今も、巫女の力などなければよかったと隠す人間もいる。

それで、癒いよしが国全体で行われない。命が……助かるはずだった命が失われていく。

いつまでも巫女の数は増えず、巫女の知識が伝えられていくこともない。

でも、ほんの少しのこと——高熱の時は水分を取るとか、血を止めるために木を挟んだ包帯で圧迫することか……癒いよし以外のほんの少しのことで、助かる命がある。

そういうことすら、この国では伝わっていない……巫女がいらないのだから仕方がないと命を手放してきたのかもしれない。

そうじゃない。巫女の力に頼らなくてもできることなどいくらだってある。ほんの小さな力しかない……下級巫女ばかりの駐屯地にいたからこそ、分かる。

高熱を出した人の夜通しの看病。高熱が続くと食事も取れない。食事が取れなければどんどん弱っていくばかり。

熱を下げるための方法は額じゃなくて、脇の下を冷やすのだ。時には水を張った桶おけに体を沈める。必要なことだ。他にも、少量で栄養があり消化もよく負担にならない食べ物。咳、鼻水、熱、頭痛、腹痛……それぞれによいとされる食べ物。見習い巫女になるまで私も知らなかったことだ。

やはり病やまいにより多くの人が亡くなっている街で、疲れを取ることしかできないから役に立たないと言っていた見習い巫女のミミ。だけれど、それは巫女の魔力を回復させるといっても力強い力になった。

それだけじゃない。ミミは、必要なことを患者たちに的確に伝えてくれた。病状を見て、癒いよしを施ほどこす順序を患者に伝えたりもしていた。

患者の顔色を見てマリーゼが癒いよしすぎないように合図を送つてと頼んだ時は、幼い見習い巫女にもかかわらず、問題なくこなせていた。

巫女の力を持たない巫女……癒いよし魔法ではない巫女の知だけを扱う人間が、いるかないかだけでも違うのではないだろうか。——けれど、今はそのことを考えている場合ではない。

「ありがとう、ユーカ。私たち巫女は、疲れを取ってもらえば魔力が回復します。巫女が多くの者を癒いよすためには、ユーカのような人間が必要なのです」

ユーカにとりより、母親に聞かせるために口を開く。

「続けます、癒いよしを。【癒いよし】」

次々に癒いよしを施ほどこしていく。今にも死にそうな人たちが元気になる姿を見て、母親は複雑な表情を浮かべた。

「ユーカ……ママが間違っていたの？」

「ううん、ママ、違うよ。ユーカが、ママと離れるの嫌だつて言ったから。だから、ママが私を守ってくれたんだつて知ってる」

キノ王国であれば、十歳で巫女の素質があると分かった後は、街の神殿で巫女見習いとして学ぶ街を離れるのは十五歳になってから。どこに行きたいかという希望も考慮される。それに、十五歳ともなれば、巫女でなくとも親元を離れて働きに出たり、嫁いで行ったりと親離れを始める年齢だ。十歳で親元を離れるのは辛いよね。親も子供も。

【癒いよし】、【癒いよし】——

「ハナ様、水分と食事の指導は終わりました。そろそろ癒いよしを」

ユーカと癒いよしを続けていると、背後から声がかかった。ルーシエが戻ってきたんだ。

目の前には、山のような患者の数。キノ王国では、中級巫女と見習い巫女が応急処置をしていたが、ここでは応急処置をする者もない。重症患者が重症のまま運ばれてくるのだ。

「ユーカは、疲れた人をどれくらい元気にしてあげられるの？」

「いつもは、ママとパパとお祖母ちゃんと妹にしてあげてる」

つまり、四回ができるということか。

「ルーシエ、あなたも癒いよしに加わつて。ルーシエは何人いけそう？」